

平成24年度「重点研究費」研究成果報告書

研究課題	発達障害を有する子どもの身体問題（感覚情報調整処理・身体症状・身体運動）の実相に関する実証的研究—発達障害の本人・当事者のニーズ調査から—
------	---

研究代表者

氏名 高橋智	所属 特別支援科学講座	職名 教授
-----------	----------------	----------

研究分担者

氏名 田部絢子	所属 大学院博士課程発達支援講座	職名 学生（現、博士課程修了、大阪体育大学専任講師）
石川衣紀	大学院博士課程発達支援講座	学生（現、博士課程修了、白梅学園大学助教）
内藤千尋	大学院修士課程特別支援教育専攻	学生（現、修士課程修了）

【研究成果の概要】（文字の大きさ9ポイント・字数800字～1600字程度）

本研究では、発達障害の子ども・青少年のスポーツ振興の基礎研究として、発達障害の本人への調査を通して、彼らがどのような「身体の動きにくさ」に関する困難・ニーズを抱えているのかについて明らかにしてきた。

『身体の動きにくさ』に関する困難と『身体の動きにくさ』に関する支援ニーズについて各項目の困難度を算出したが、196項目中139項目において1%水準の有意差がみられ、さらに35項目において5%水準の有意差がみられた。

χ^2 値比較とオッズ比比較により高い数値を示した項目を見ると、手指の運動の不器用さに関する項目が目立っていた。そのほかに眼球運動の困難に関する項目も目立っている。眼球運動に困難があるとボールの動きを捉えることが難しいなど、球技の苦手さの一因となる可能性もある。

また「左右の手足をバランスよく動かせない」「右と左を交互に動かす『クロスパターン』の動作がとても苦手」「左右対称の動き方ができない」など、左右関係の困難に関する項目が軒並み上位となった。両手や両足など体の左右両側にある部分をチームワークのように協力させて動かすことが難しい両側協応の問題をもつ人は、両手両足を同時に動かすことができない、利き手が定まらない、左右の混乱があるなど、左右関係で様々な困難を抱えている。

ほかにも、発達障害に特有の感覚統合障害に起因すると考えられるものが、高い困難度を示していた。発達障害の子ども・青少年のスポーツ振興においては、発達障害特有の身体感覚や感覚統合障害の問題について十分に注意を向け、支援方法を開発していくことが不可欠である。

今回の調査はあくまでも発達障害等の感覚統合における「身体の動きにくさ」の全般的傾向を示したに過ぎず、一人ひとりの支援に対しては、個別の困難・ニーズに即した丁寧な対応が必要である。

今後の課題であるが、今回は項目ごとに発達障害本人と「健常」学生において有意差が見られるのかどうかのみを検討した。しかし、それぞれのチェックリスト内の項目の相関関係やチェックリスト間の構造を調べる必要がある。今回の調査では発達障害本人133名、学生118名から回答を得たが、さらに今後の継続調査において回答者数を拡大させ、障害種別・年齢別・就労の有無等との検討を通して、分析をより精緻にしていく必要がある。

なお本研究で用いた調査票に対して、調査にご協力いただいた本人の方から「どの程度当てはまっていればチェックするべきなのか尺度が難しい」「調査票の分量が多すぎて負担になる」等の意見が寄せられた。調査票の改良を重ね、発達障害を有する本人の方それぞれに適した調査票を用意する必要がある。

研究成果発表方法

[発表論文名(口頭発表を含む)、氏名、学会誌等名(投稿中・投稿予定・執筆中)を記入する。]

※本経費を用いて、報告書(冊子等)を作成した場合には、本様式とともに1部を提出すること。
なお、提出された報告書は教育実践研究推進本部を通じて附属図書館へ寄贈する。

【口頭発表】

- ① 高橋智：本人調査からみた発達障害者が有する『痛み』の諸相、「発達障害と痛みに関する研究会&意見交換会」(文部科学省科学研究費補助金新学術領域研究「構成論的発達科学—胎児からの発達原理の解明に基づく発達障害のシステムの理解—)、東京大学先端科学技術研究センター、2013年1月11日
- ② 高橋智：発達障害の子どもが困っている身体症状(感覚過敏、身体の不調・不具合)の実態と求めている支援—発達障害の本人調査から—、東京学芸大学附属学校研究会学校保健部会、東京学芸大学附属小金井中学校、2013年1月23日
- ③ 高橋智：学齢期の高次脳機能障害の子どもが抱える修学・学校生活の困難・ニーズと教育支援の課題、国立障害者リハビリテーションセンター「平成24年度高次脳機能障害支援普及事業公開シンポジウム」シンポジスト、三田共用会議所、2013年2月22日

【論文】

- ① 高橋智・井戸綾香・田部絢子・石川衣紀・内藤千尋：発達障害者の「身体の動きにくさ」の困難・ニーズに関する調査研究—本人調査を通して—、『東京学芸大学紀要』第65集に投稿予定。